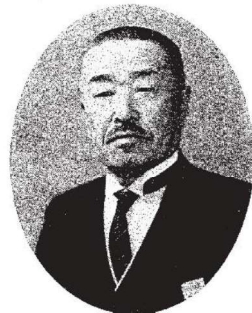


# 丹波育児院

～辻原光治とその周辺の人々～



倉田健治郎(1869～1944)

## 上大久保の倉田健治郎

明治一七年(一八八四)六月の丹波教会発足時の会員三十名中に、現在の京丹波町域からの参加者としては上大久保の倉田健治郎と橋爪(松山)の近藤亮太郎の二人がいました。倉田はまだ十五歳、近藤もおそらく同じくらいで、二人とも医師をめざして勉学中でした。近藤亮太郎(一八八八)については次回触れることにして、今回は「倉田はん」として親しまれた上大久保の医者で、晩年には梅田村長をつとめた倉田健治郎(健次郎とも一八六九～一九四四)を取り上げます。

健治郎は明治二年(一八六九)、代々医を家業とする倉田家に生まれました。父の柳造は、伊勢の津藩(藤堂家)に仕えた典医でしたが、明治維新の際に当地に移り住んで開業しました。伊勢から丹波へ、どういう経緯があったのかは不明です。明治二二年に梅田村が誕生したとき、柳造は村の「種痘医」になっています。

## 井上半介に七年間学ば

健治郎は、幼くして船枝(南丹市八木町)の井上半介(堰水)の私塾「発蒙館」に入り、七年間学びました。井上半介(一八四二～一九一〇)は、これまでも名前が出てきましたが、ここで少し詳しく見ておきます。井上は天保十三年(一八四二)、船枝村に生れ、十三歳で陽明学(儒学)を学び、熊

沢蕃山に私淑していました。元治元年(一八六四)、二二歳のとき発蒙館を創設して農村子弟の教育を開始し、明治五年(一八七二)に学制が公布されると推されて新庄小学校長に就任、二一年(一八八八)には園部高等小学校長に抜擢され、四一年(一九〇八)には創立された船井郡立高等女学校の校長となり、病氣退職する四三年六月まで勤め、同年十二月、逝去しました。享年六九歳。

## 発蒙館でキリスト教接近

発蒙館は全寮制で、現在の小中学生の年代の男児が主な対象でした。塾舎は八畳二間続きの元弓道場で、三十余名の塾生が寝食を共にしながら学びました。井上が園部へ移る明治二一年まで二四年間にわたって存続し、郡内外に有為な人材を多数輩出しました。

倉田は七年間在塾しまし

たが、それがいつからいつまでだったかは確認できていません。ちなみに倉田は岩崎革也と生没年とも同じですが、岩崎は十六年(一八八三)から数年間発蒙館で学んでいますから、両者が机を並べて学んでいた時期があったはずですが。

発蒙館では十七年三月三十日に「大リバイバル」が起きました(「丹波地方に於ける基督教の受容」岩井文男)。リバイバルとは「信仰復興」ともいわれ、信仰心が急速に高まったり信仰者が急増したりする現象です。

十八年には安部磯雄が発蒙館に三ヵ月間滞在して伝道し、翌年七月には新島襄も来塾して説教、塾生に大きな感銘を与えました。

これらの場面に倉田が立

ち会ったかどうかはわかりませんが、発蒙館時代にキリスト教に出会い、教会設立に参加するに至ったことは間違いのないと思われます。

発蒙館の向かい側には井上の妻の生家(西村氏)があり、丹波教会はそれに隣接して建っていました。

## 医者の代名詞「倉田はん」

発蒙館を退塾した倉田は京都に出ます。医者になることをめざして独逸学校と医学学校に入りました。独逸学校は、現在の京都薬科大学の源流となった学校で、明治十七年に設立され、ドイツ語を通じて西洋医学・薬学を教育しました。

医学学校は、明治四年に京都仏教界の僧侶らによって発足した京都療病院が十二年に併設した学校で、京都府立医大の前身です。

倉田は「家事都合により」

両校を中途退学しますが、その後も京都に留まり、新宮涼亭、山田俊卿、劉小一郎に就いて苦学修業しました(『現代船井郡人物史』)。ただし『日本医籍録』(医事評論社 大正十四年)には「済生学舎卒 明治二六年」とありますから、最終的には東京の予備的な済生学舎を出て医術開業試験に合格したのと思われま

す。何年に帰郷して倉田診療所を継いだのかはつきりしませんが、二八年(一八九五)には父の後任として梅田村医になっていきますから、その前年くらいには帰郷したのでしょう。

倉田医師は、明治・大正・昭和の三代にわたって活躍しました。近所の伴田某氏

村内はもちろん三ノ宮村猪鼻や草山村丹波篠山市)、菟原村(福知山市)まで往診し、地方一帯に親しまれました。夫人が調剤を担当しました。子どもたちには「倉田はん」というのが医者の代名詞となっていました。

## 戦時下に梅田村長

『梅田村史』(昭和四三年)には歴代村長十三人が写真付きで掲載されています。倉田は二十代中の第十八代目です。在任期間が記されていないので『職員録』(国立印刷局)で調べると、昭和十三年に就任して十四年も継続しており、十五年以降が不明ですが、任期は四年でしたから十六年までは在任した可能性があります。

いずれにせよ日中戦争勃発(昭和十二年)から太平洋戦争開始(十六年)に至る時

期です。戦時体制が強化され、村役場も出征兵士の送り出しや村葬、日用品・食料品の配給などに追われたはずで、戦争がいよいよ泥沼化していた十九年三月、倉田は老衰のため死去します。遺族はその後転出し、診療所も閉鎖されました。

倉田のクリスチャンとしての活動は、教会創立直後の十七年十一月に雀部村(南丹市八木町)の伝道担当になったとある(「丹波基督教会史」)以外、確認できません。須知部や松山部へは参加しなかったのかもしれませんが、近藤亮太郎や辻原光治との交流を示す資料も見つかりませんが、若き日に共に信仰に入り、隣り合う村で生きた同時代人として「倉田はん」を取り上げた次第です。(山下幾雄)